

空襲の風景映す弾痕

昭和20(1945)年6月7日の大空襲。炎に追われた多数の市民が、当時一番大きかった長柄橋の下に避難してきたところ、米軍機が大型爆弾で爆撃。更に土手に上がった市民らに照準を合わせて、機銃掃射の波状攻撃を加えた。犠牲者は約400人にのぼったという。長柄橋は昭和58年に現在の橋に架けかわったが、市民運動が実り、弾痕のある橋脚の一部が橋の南詰にある観音菩薩像横や柴島高校などに残っている。

「地獄の長柄橋」と呼ばれた大空襲の惨劇。刻まれた弾痕が伝える空襲の風景を語っていただいた。

JRと阪急交差部橋脚(柴島1)

柴島浄水場

長柄橋南詰の明倫観世音菩薩像

柴島高校

堤防で目撃した 長柄橋の空襲と巨大な穴

6月7日、坂上貞夫さん(83)は大阪の空襲警報発令を当時通っていた高槻中学校で先生から聞いた。電車は止まっていたが、たまたま走っていたトラックに乗せてもらい、東淀川区へ帰りついたのは11時半頃のこと。当時鐘紡の繊維工場があった場所(現在の東淡路1交差点付近)から淀川の堤防を長柄橋へ向かって歩きだしたとき、東淡路上空に米軍の戦闘機が2機、橋のほうへ飛んでいくのを見た。「パンパンパンという音がして、淀川の堤に等間隔で砂ボコリがあがったんです。その周りにはたくさん人が寝転んで…死んでいたんだと思います」と坂上さん。「長柄橋の手前まで行くと、堤には爆弾の落ちた跡に直径10m、深さ5mくらいの巨大な穴ができていました。すり鉢状になっていて人が落ちて這い上がろうとしている、周りには人が死んでいる…長柄橋の半分は爆弾で穴が空き、鉄筋でできた橋が燃えていました」。幸い自宅は無事だったが再会した家族は大きな荷物を何段にも背負って逃げていたという。



坂上貞夫さん

東淀川区出身。現在は大阪城でボランティアガイドとして活躍する他、戦争体験の語り部としての活動を続けている。

駅から駅へ。 戦火をくぐり抜けた足跡

石井富恵さん(86)は駅員として働いていた崇禅寺駅にいた。空襲警報が鳴り電車が止まった一時間後、駅は飛行機の爆音に包まれた。「何が起きたのかわからず、しゃがみこみました。何度目を開けても真っ暗で何も見えませんでした」。駅は破壊され、窓ガラスも駅の丸い時計も吹き飛んでいた。「いつのまにか右手首から血がだらだらとしたり落ちていました。ふと駅員の責務を思い出し、切符や売上げの入った黒いかばんを拾い上げたところ、飛行機がもう1機飛んできました」。防空壕へ急いだが既に満員。後ろへへばりついたが背中が丸見えの状態で生きた心地がしなかったという。敵機から隠れながら線路づたいに歩き淡路駅へとたどり着いたが、ここにも焼夷弾の火の手が。東淡路の商店街は機銃掃射でガラスが全てなくなり、破片で絨毯を敷いたようになっていたが、その上を裸足で逃げた石井さん。命からがら家へとたどり着くと父が「幽霊と違うか。良かった」と米のない菜っ葉ばかりの昼ごはんを炊いてくれたことを、今も鮮明に覚えているのだという。



石井富恵さん

16才で京阪神急行電鉄へ入社し、配属された崇禅寺駅で大阪大空襲に遭遇。戦後70年の今年、自身の経験を手記にまとめた。